御中道：富士中腹の巡礼路

中道は、富士山の標高 2,300～2,800 メートル帯域を周回する巡礼路でした。この道は富士山登頂よりさらに意志の力と信心を試すものとされていました。大沢崩れをはじめとする数々の谷を渡る道中は危険だったため、最も熟練した巡礼者のみがこの道に挑みました。富士講の巡礼者は、この道を踏破することを、敬意を表す接頭辞「御」をつけて「御中道」と呼びました。時代の経過とともに、この道そのものも御中道と呼ばれるようになりました。

巡礼者は大抵山頂に参拝した帰りに中道を歩きました。頂後の下りの道中に時計回りに歩かれるのが常でした。中道は吉田口登山道の不浄岳（標高 2,500m）から時計回りに分岐していました。巡礼者たちは富士山南側で一晩を過ごし、大沢崩れを越え、小御嶽神社を参拝した後、再び吉田口登山道に合流しました。この合流点は不浄岳の下方だったため、中道は完全な周回路ではありませんでした。

特別な装備も用いられました。巡礼者たちは長さ 2 m にもなる白い布を頭部に巻いて頭巾としました。この布は、緊急時には登山ロープの役割も果たしました。また、彼らは「中道杖」と呼ばれる丈が 2 m 以上ある杖も使っていました。

大沢崩れ

中道で最も危険だった箇所は、大沢崩れという富士山西面にある V 字型の谷でした。巡礼者たちは山腹で夜を過ごし、夜明けにこの谷を越えました。（今日、中道の多くの箇所は通行が困難になっており、登山者が歩くことを許可されているのは北面のよく整備された短い区間のみです）。

大沢崩れの先には大沢室という小屋があり、巡礼者たちは過酷な大沢越えの後ここで休息を取りました。その隣には三柱神社と呼ばれる小さな神社がありました。この神社には、無事に大沢崩れを越えられたことへの感謝と成果の証として富士講信者たちが奉納した木製の銘板（マネギ）が並べられていました。